伊丹公論022902　2面　尚❶藤❷奥❸尚❹井❺藤❻尚

「センセの言葉たち」

第7回 日本一短い自分史
大賞に島原市の福島洋子さん

ことば蔵はこのほど、「田辺聖子さんと私」「バラ色」をテーマに募集していた「日本一短い自分史」の大賞に長崎県島原市のパート、福島洋子さん（50）の作品「センセの言葉たち」を選んだ。

日本一短い自分史の募集は平成25年度から始まり、今回が7回目となる。9月1日から募集し、市内外から計297点の応募があった。

審査員は伊丹大使の坪内稔典・佛教大名誉教授、永吉雅夫・追手門学院大教授、中周子・大阪樟蔭女子大教授の3人。

秀作入賞者は、大阪府枚方市市の稲森彩子さん（21）、福岡県福岡市の波多江伸子さん（71）、加古川市の前田明日菜さん（18）の3人。

大賞作品の全文は以下のとおり。

◇　◇

「そんな、たった八百字で自分史書けやて無茶やわ。けどおもろいねぇ。アハハ」

今回の募集を知ったとき、聖子センセ（親しみを込めて）の笑い声が聞こえた気がした。

私とセンセの作品とのつき合いは、たかだか二十三年。モチロンお名前は知ってたし、ドラマ化された作品も観た記憶はある。

それが人生に深く関わり始めたのは、広島から大阪へ出た二十七歳の頃。仕事と婚約者をいっぺんに失い、右も左もわからぬ大都会で、呆然と途方に暮れていたどん底の時期だ。

絶望と孤独と自信喪失――。

ワンルームの部屋と図書館や書店を往復し、本をむさぼり読む日々が続いた。

センセの作品に触れたのもその頃。心に響く言葉を書き写し始めた『言の葉ノート』。その一冊目に抜粋した文章が出てくる。

『飛んでごらん、いまなら空を滑ることもできる』（雨の草珊瑚）

『面白がって働こな』（夜の香雪蘭）

きっと当時のすさんだ心に、勇気や光を与えてもらったのだろう。

現在私は五十歳で、分厚いノートも十二冊目。いまも田辺作品を手に取っては、珠玉の言葉を書き写しているが、センセの訃報を知り、改めてノートを読み返してみた。

『心の皺は深くなった気がする。この皺は顔の皺とちがい、深く多くなるほうがいいのではあるまいか』（舌ざわり）

『いい女、などというのは、別れのあと何を手に残したか、という女なのではなかろうか』（ほのかに白粉の匂い）

ああ、なんて素敵な言葉たち。若い頃より年経てからの方が心に染み入ってくる。

天国の聖子センセ、本当にありがとう。あなたの作品とその言葉にどれほど力をもらえたことか。おかげで人生が豊かになりました。

最後は、心のお守りにしている言葉で――。

『いっぺんでも数多く笑（わろ）たほうが、人生は勝ちやねん』（夢笛）

◆　◆

福島さんの話「電話で受賞の連絡をいただいたとき、窓から見えた青空。『ほんまによかったねえ』と田辺聖子先生がほほえんでおられるようで、胸が熱くなりました。私にとって田辺作品は〈心のサプリメント〉。読めば読むほど噛み応えがあって、深い味わいがじゅわ～っと広がります。これからも、せっせと珠玉の言葉を拾い続けていきます」。

愛する田辺さんの言葉が詰まったノートと福島さん＝島原市の自宅で

蔵出しニュース

帯ワングランプリ・調べる学習コンクール
ことば蔵コンテスト受賞者決まる

ことば蔵はこのほど、自作本の帯の出来栄えを競う「第5回帯ワングランプリ」の伊丹本屋大賞に伊丹市の岸田早永（さえ）さん（東中1年）、中村江里彩さん（同中1年）、立元綾香さん（高校3年）＝名古屋市、髙田遥佳さん（大学1年）＝札幌市の作品を選んだ。また、「第2回伊丹でみつける・さぐる・かんがえる図書館を使った調べる学習コンクール」の優秀賞に、小椋伊織さん（有岡小2年）＝「ありおかじょうのヒミツ」、山田凛桜（りお）さん（南小4年）＝「まさつについて」、白川七琉（なる）さん（伊丹小6年）＝「ぼくらの街の宮前商店街」、森美青（みさお）さん（伊丹北高3年）＝「記憶に残るキャッチコピーの共通点」、いたみアーカイ部＝「明治初期の伊丹市域の小学校の変遷」を選んだ。

11月3日にことば蔵で各賞の表彰式が行われ、帯ワングランプリ伊丹本屋大賞の一人、岸田さんは「本屋大賞に選ばれると思っていなかった。実際に本屋の店頭に並び、お客様に見られることが少し恥ずかしいけれど、とてもうれしい」と声をはずませた。一方、調べる学習コンクールの小学生の部（低学年）に「ありおかじょうのヒミツ」を応募した、小椋伊織さんは、「有岡城や猪名野神社、伊丹シティホテルなど関係各所に回るのが大変だったが、表彰されてとてもうれしい。今度は真田幸村について調べて応募したい」と次回への意気込みを話していた。

帯ワングランプリの作品は9月1日まで募集、全国から357点の応募があった。一方、調べる学習コンクールの作品は8月21日から9月15日まで募集、市内から21点の応募があった。他の入賞者と作品は次のとおり。

【帯ワングランプリ】ことば蔵賞＝伊丹市、中川こころさん

【調べる学習コンクール】▽教育長賞＝橋本茉那美さん、「人間失格に見える『太宰治』」▽審査員賞＝安田こころさん、「鳥が集まる昆陽池公園」▽図書館長賞＝紗優さん（2名）、「人々の暮らしを支え身近なユニバーサルデザイン」

伊丹本屋大賞を受賞した岸田さん（上）と調べる学習コンクール優秀賞の小椋さん（下）

社会教育施設 連携深める
博物館など5館が震災展示

伊丹市内の社会教育施設連携企画として、博物館など5館で企画展「阪神・淡路大震災25年を想う」を開催している。

図書館や公民館などの社会教育施設間の情報共有や連携事業をより充実させ、持続的なまちの発展に繋げようと、社会教育委員の会が昨年11月、「伊丹愛ネットワーク」を提言。今回の共同展示は、平成7年（1995）1月17日に発生し、伊丹市にも大きな被害をもたらした阪神・淡路大震災を風化させないために企画された。

1月11日から社会教育施設（博物館・きららホール・ラスタホール・中央公民館・図書館）で同時に開催することにより、多くの市民への周知と意識の共有を図っている。

博物館では震災時に救い出された、ままごと道具を展示するとともに、その後の博物館活動について紹介。きららホールでは、飲料水袋を市民に実際に持って体験してもらう企画や、市の危機管理室職員による防災体験講座を実施している。

また、図書館以外の施設では、「被災体験ボード」として付箋に市民の被災体験を記入してもらいホワイトボードに貼り出した。最終的に博物館で集約し、郷土の資料とする。図書館本館・南分館・北分館では、震災や防災に関する図書を展示するなど、各施設が同じ大きなテーマの中で、これまでのノウハウや特性を生かした事業を展開した。

ことば蔵では当時の新聞や資料が並んだ

この印刷物は１万5000部作成し、印刷経費は１部あたり26円です。